

ロッシャーの「歴史的方法」の再検討 —初期論考を中心に—*

丸岡高司

The Studies about a Method of Roscher by Menger, Eisermann and Hübinger showed to us that a way of thinking that laid the foundation of his method came from Gervinus and Ranke. In addition, according to a study by Weber, the method was based on a thought of Fichte and Adam Müller and a thought of Hegel. These are precedent studies which are related to a challenge of this article to place a historical method in the genealogy of thought to affect history of those days. But they have one problem. As Menger has denied testimony of Roscher himself, and not accepted relation with the historical approach of the Historical School of Jurisprudence, Roscher's Method was not understood, following what he described. Though his method was considered as the means to derive a development law in those studies, it doesn't coincide with his thought.

In order to solve this problem, first the method is reconsidered in accordance with texts in his books. and then close relations between it and history of those days shall be clarified.

I. はじめに

ドイツ旧歴史学派の1人とされる¹⁾ロッシャー (W. G. F. Roscher, 1817-1894) は、歴史的方法による経済学を提唱したことで知られている。そして、その方法は、彼の代表的著書『国家経済学についての講義要綱—歴史的方法に照らして』(以下、『要綱』と記す) で述べられていること²⁾に従うと、歴史法学派を代表するサヴィニー (F. C. v. Savigny, 1779-1861) が用いた方法を経済学に移植したものであった。

しかし、カール・メンガーは、『社会科学、特に政治経済学の方法についての研究』³⁾で、本人の証言を受け入れなかった。彼によると、ロッシャーは「客観的真理」を追究するためにはその方法を導入したのに対して、歴史法学派は、歴史的手法によって「客観的真理」を

求めたのではなく、法律の歴史的・無意識的起源ないし成立を説いたのであった⁴⁾。この時、メンガーの言う「客観的真理」とは何らかの法則を意味している。つまり、彼は、歴史的方法が歴史の発展法則を追究するために採用されたと解釈していた。そして、このことから、その土台となった考え方は、比較史的研究からわかる発展の類似を政治学に応用したゲッティンゲン大学の歴史家、特に、歴史研究を通じて歴史の普遍性を明らかにすると、最終的に人類史を構成できると考えていたゲルヴィヌス (G. G. Gervinus, 1805-1871) に由来するものとされた⁵⁾。

マックス・ウェーバーが「ロッシャーの『歴史的方法』」⁶⁾で方法論批判を行ったことは、広く知られている。その際、彼は西南ドイツ学派の歴史認識論に依拠しながら、メンガーが関心を寄せた問題を扱った。その認識

* 論文審査受付日：2004年9月21日。採用決定日：2005年8月24日（編集委員会）

論によれば、歴史学は、普遍化に向かう自然科学に対して個別化に向かう科学である。だが、それとは別の認識論に基づいているロッシャーの歴史的科学では、発展の法則性が認められていた。それゆえ、それは、ヴェーバーが考えていた歴史学と対立するものとして批判されたのであった。また、彼によれば、普遍化と個別化の両方向に向かう歴史的科学を考えていたロッシャーには、単に同類を表すだけでなく、個性も示すような類概念が必要であった。しかも、その概念は、認識において通用するだけでなく、それ自体の実現として個別的事象を生成するものでなければならなかった。それゆえ、彼はロッシャーの方法を、フィヒテ (J. G. Fichte, 1762-1814) やアダム・ミュラー (A. H. Müller, 1779-1829) に見られた形而上学的な統一的実在⁷⁾ の考え方や、ヘーゲル (G. W. F. Hegel, 1770-1831) の基礎にあった流出論⁸⁾の系譜に位置づけた。この結論は、決してロッシャーの形成史の実証的研究によって明らかになったものではなく、ヴェーバーが彼の方法と考えていたものからの論理的な帰結として導き出されたのであった。

歴史的方法の起源の探究は、ロッシャーの草稿研究⁹⁾によっても行われた。その代表的研究が、ゴットフリート・アイザーマンによるものである。彼は、『ドイツ国民経済学における歴史主義の基礎』で、自らが発掘した書簡の内容から、ロッシャーがゲルヴィヌスを師事していたことを明らかにした¹⁰⁾。さらに、息子カール (C. Roscher, 1846-1920) が雑誌¹¹⁾に公開した書簡によって知られていた、ランケ (F. L. v. Ranke, 1795-1886) との師弟関係にも触れ、同時代の歴史家の思想がロッシャーの方法論形成に影響を及ぼし

たことを指摘した。

ゲルヴィヌス研究の中でも、ロッシャーの方法は、彼の歴史学方法論を継承したものと考えられている。ガンゴルフ・ヒュービンガーは、アイザーマンの論文を参照しながら、歴史学の中では影響力をもたなかつたゲルヴィヌスの method 論が、ロッシャーを経由して社会科学に浸透したと述べた¹²⁾。

これらは、歴史的方法を当時の歴史学に係わる思想の系譜に位置づける、という本稿の課題と関係する先行研究である。だが、それらは一つの問題を孕んでいる。それは、メンガーがロッシャー自身の証言を否定し、歴史法学派の歴史的手法との関係を認めなかつたように、ロッシャーが述べていることと整合するように彼の方法を理解していないことである。それらの研究では、それが発展法則を導出するために採用されたと捉えられていたが、このことは彼が述べていることと一致しない。確かに、彼は、『トゥキディデスの生涯、作品、時代』(以下、『トゥキディデス』と記す) の緒言で、国家科学を発展法則の学問と見なしていたし、『要綱』の序文及び序論で、政治科学においては発展法則の導出が求められると思っていた。しかし、緒言の別の箇所では、「歴史的な類似 (historischen Parallelen)」、いわゆる「アナロジー (Analogien)」が分析道具 (Werkzeug) として必要とされるのは良いが、それ自体が目的 (Selbstzweck) であつてはならない」 (Roscher, 1842, S. XI f.) と述べているから、発展法則 (アナロジー) の追究が最終的な目的であつてはならないのであった。

本稿では、この問題を解決するために、まず、ロッシャーの方法を彼自身のテキストにそくして再検討する。その後で、それと当時

の歴史学との結びつきを明らかにしたい。その際特に、『偉大なソフィストにおける歴史理論の系譜について』¹³⁾（以下、『ソフィスト』と記す）や『トゥキディデス』といった初期論考に注目する。なぜなら、これらは、彼の考えを知る上でこれまであまり参照されなかつたが、近年、ラテン語で書かれた『ソフィスト』がドイツ語に翻訳されたり、『トゥキディデス』の復刻版が出版されたりと、それらの重要性が改めて認識されているからである。またなにより、『要綱』で自分の方法をまとめた際に、彼はそれらを参照しており、方法の成立までの思想的連続性が認められるからである。

II. 歴史的方法の再考

ロッシャーは、『要綱』の序文及び序論で初めて、経済学における歴史的方法を説明した¹⁴⁾。彼の言葉に基づく要約を用いて概観しておくことにしよう。それは、次の10点に要約できる。

- ① 諸国民が経済的観点から何を考え、何を求める、何を感じたかを叙述する。また、何を得ようと努め、そして、達成したのか、また、なぜそれを得ようと努め、なぜ達成出来たのかもあわせて叙述する。
- ② 国民はたんに現在の文化段階に生きている個々人の集合ではないから、国民経済の研究は現在の経済状況を観察するだけでは充分でない。現在に至るまでの文化諸段階について研究することも同じように重要である。
- ③ 全ての現象に適用される本質的なものや法則的なものを見つけ出すことが困難であるから、経済現象に限定して、諸国民

の比較をするのである。それでも、国民はますます互いに依存し合い、複雑に結びついているから、たんに経済現象を考察するだけでも、関連する全ての個別事象について考察することを余儀なくされる。その場合、繁栄と衰退のどちらの文化段階も経験した国民の比較的単純な経済現象からの類推が、大きな助けになる。

- ④ それぞれの経済制度と結びついている政策を実践する人々の政治的理念を、相対的に評価する。
- ⑤ 人間の営為を、実際のものに出来るだけ忠実に描く。
- ⑥ 諸国民の営為を比較することによって、人間の政治的衝動を見つけ出す。
- ⑦ 客観的な真実を示す。
- ⑧ 諸国民に見られる共通の発展経過を発展法則として示す。
- ⑨ 実務家のために政治的指導の指針を提供するのではなく、彼らの政治的感覚を育成する。
- ⑩ 政治的所産を後世に伝える。

以上が歴史的方法の骨子である。③と⑧からは、発展法則を示すことが、この方法にとって目的だと解釈することもできる¹⁵⁾。しかし、ここには別の目標も挙げられている。すなわち、あらゆる政治や経済に関わる現象を事実に忠実に叙述することと、経済理論をそれぞれの時代と結合しているものとして捉えることである。それゆえ、ロッシャーの方法を発展法則とだけ結びつけて考えるのは、短絡的な理解だということになる。むしろ、③と⑧以外の項目で主張されている内容も考慮すると、発展法則の導出は、歴史的方法を補完するためのものだったと推論できる。そして、彼が『要綱』で新しい経済学の方法を宣言し

た眞の狙いは、政治ないし経済に関わる現象を事実に忠実に叙述することと、経済理論をそれぞれの時代と結合しているものとして把握すること、という 2 つの点にあったと捉えることができるるのである。つまり、『要綱』において提唱された歴史的方法とは、人類史の全体にわたる知識を基にして、経済現象を、事実に即しているという意味で「客観的」に捉えるための方法であった。そして、そのような方法による経済学は、④と⑦とに結びつけて言うと、「客観的な体系」、つまり、論理矛盾のない思弁によってではなく、事実に即して構成された体系を提供できる経済学であることになる。その「体系」に照らすと、リカードゥに見られるような思弁によって構成された理論や政策は、それぞれの時代の経済現象と結びついている学説に過ぎないことを露呈するのである。

確かに、『要綱』のみから、歴史的方法による経済学とは何かを理論的に把握するのは、容易ではない。なぜなら、『要綱』の本論で書かれていることは、多岐にわたる経済史の要約であり、付録のようにまとめられた学説史だからである。それでも、序論第 1 節が『ソフィスト』の 18 頁から 60 頁（ドイツ語訳では、55 頁から 102 頁）と、『トゥキディデス』の 17 頁以下を参照しながら書かれていることを根拠にして、それら 2 つの著作にも目を向けると、彼が目指した経済学の姿が明らかになってくる¹⁶⁾。そこで次に、『ソフィスト』と『トゥキディデス』にも注目しながら、『要綱』までの時点で歴史的方法と彼が呼んでいる方法論の実体を把握することを試みる。そのため、最初に、『ソフィスト』を『要綱』と関係付けながら検討する。

III. 歴史学方法論に関する論考の検討

ロッシャーが『要綱』で歴史的方法を定式化するにあたって注に挙げた『ソフィスト』は、歴史研究において史料批判が浸透したことや、古代ギリシア研究が進展したことを背景にして生まれた。そこでは、古代史研究の発展の所産と言えるソフィスト再評価を踏まえて、彼らの読み直しがなされた。しかし、序言によれば、この論文は「後に国家学¹⁷⁾を論じるにあたって採用する方法」を説明するために書かれたのであるから¹⁸⁾、そこでの議論は、後に『要綱』で展開される方法論と無関係ではなかった。

『ソフィスト』の中でロッシャーは、歴史のダイナミズムが権利を巡る党派闘争によって生まれていること、その闘争に関わる党派の理念を、学問体系に仕立て上げる政治哲学の内容が「主観的」であること、こうした主観性が否定できない政治哲学に対して、人類史に実例を求める歴史的学説の内容が「客観的」であることを論じた。もちろん、この議論の根底にあったのは、哲学とは、党派闘争のイデオロギーだという考え方であった。そして、この見方が経済学に移植された時、「主観的」に構成された理論や政策¹⁹⁾の代わりに、非党派的、すなわち、「客観的」な経済学体系を提唱するということになって現れたのである。

ここで、ロッシャーが特別な意味で用いている「主観的」という用語について補足しておく。この用語の意味は、思弁自体が論理矛盾のないものだとしても、その思弁は現実に対する個人的見解から始まっている、ということである。簡潔に言うと、哲学者の判断が自分の生活環境に依存している、という意味

になる。それに対して、「客観的」という用語は「主観的」と対になる用語で、非党派的という言葉とほぼ同じ意味で用いられている。また、この用語は、事実に即している、というように解釈することもできる。なぜなら、事実に即しているがゆえに客観的な、または、非党派的な判断を下すとロッシャーが考えていたからである。

政治哲学に対する彼の見解にも注目してみよう。『要綱』序論の第1節で、「哲学者は、概念ないし判断の体系を求める。しかもできる限り抽象的に。抽象的というのは、空間や時間による全ての偶然性をできる限り捨象しているということである」(Roscher, 1843, S. 1.) とまとめられている部分と、『ソフィスト』の第14節の「哲学者は、その大半が確かに信じてはいないが、それでも望んではいる、全ての時代ないし全ての民族の人間にとつて例外なく完璧だという国家像を、ある哲学的な着色でもって描いた」(Roscher, 1838, p. 27; 2002, S. 66 f.) と述べられている部分が類似している。それに、この箇所で注目すべき点は、その国家像が「基本的に、彼らの時代、彼らの道徳ないし慣習、そして、制度を基にして」(ibid.; ebd., S. 66.) 描かれたとされていることである。ロッシャーは、そのことがほぼ全ての哲学者に当てはまるとして、「人間精神の性質に照らして自らの体系を主張した」(ibid.; ebd., S. 67.) プラトンや「人間の自然状態を基にして体系を主張した」(ibid.; ebd., S. 67.) ホップズ、ロック、ルソーの名前を挙げるが、『要綱』でも「自然権論者」(Roscher, a. a. O., S. 1.) や「プラトンですらも該当する」(Roscher, a. a. O., S. 2.) と述べている。

また、『ソフィスト』の第26節での、「プラ

トンが我々に例外なく幸福な生活をもたらすことができると思った国家を示すとき、そして、ロックが最善だと考えた別様の国家を示すとき、たとえ彼らが異なった見解を主張したとしても、いったい誰が両者とも正しくなかった可能性があると理解するであろうか。それは、論理学者が言うところの異質な判断なのであって、相反する判断ないし論理矛盾する判断ではないのである」(Roscher, ob. cit., p. 55; Roscher, a. a. O., S. 96 f.) という見解が、『要綱』では、「2人の哲学者が2つの党派の異なった政治的信条告白を体系にするとき、それらは矛盾している。歴史的に見たら、それぞれ矛盾していないが。それらの体系は、それぞれの国民や、時代にとつて正しいと言える」(Roscher, a. a. O., S. 2.) と言い直されている。

以上のことから、ロッシャーは政治哲学の「主観的性質」(subjectiver Charakter²⁰⁾) と歴史的学説の客観的性質という対比を考えていたと理解できる。そして、『要綱』の歴史的方法を説明している箇所でも同様な主張がされていることを考慮すると、それは、彼の方法の重要な部分であったと言えよう。

このように、『ソフィスト』での論述は、『要綱』で示された経済学の内容と関わっていたことがわかる。それでも、『ソフィスト』は、党派的学説と非党派的学説の対比に留まり、歴史的方法によって「客観的な体系」を提供できることを論じるまでには至っていない。ロッシャーはそのような方法論の定式化を『トゥキディデス』まで保留したのであった。そこで次に、『トゥキディデス』での歴史的方法に関する言及を、『要綱』におけるそれと比較検討する。

『トゥキディデス』は2部構成になってい

て、1部にプロレゴメナ、2部にトゥキディデスという見出しが付けられている。ロッシャーが『要綱』の序論をまとめる際に注に挙げた17頁以下は、プロレゴメナの2章にあたる。そして、この章では、哲学と詩作と歴史の共通点と相違点が論じられている。この章に限らずプロレゴメナ全体で意図されていることは、歴史記述が単なる個別史ではないことを明らかにすることである²¹⁾。彼はその証明によって、歴史を記述することが、1つの科学として捉えられると主張していたのであった²²⁾。

彼が考えていた歴史とは、人類全体を扱う人類史の知識に基づいて描かれるものである²³⁾。そして、そのような広範な歴史の知識は、次のようにして得ることができる。すなわち、特定の事物を深く知るには、関連する事物にも通じなければならないから、それらの歴史も研究する。さらに、似ている事物と異なる事物との比較を通じて理解を深めなければならないから、それぞれの歴史と比較するといった具合である。歴史学における個別史の地道な研究と、それと同時に進む比較史的検討から得られた人類史の知識に基づいた歴史記述には、特定の歴史的対象を主題とする、という意味で、直接の対象²⁴⁾が限定されているにもかかわらず、人類に共通する普遍性が示されている²⁵⁾とロッシャーは言う。そして、それは、個人が思弁によってつくりあげた普遍性ではないという意味で、また、事実に即しているという意味で「客観的普遍性」であった²⁶⁾。

このような歴史記述に関する考え方に基づくと、歴史と「客観的な体系」は同じ意味になろう。そして、このことを考慮すると、歴史的方法は現実を忠実に描写するための手段

だということになる。さらに、それによって客観的な真実が示される、と『要綱』で述べられたとき、ロッシャーは歴史記述と「客観的な体系」の構築を等置していたと言える。

以上の検討から、『要綱』で示された経済学方法論は、『ソフィスト』と『トゥキディデス』の内容を踏まえて構想されたものであると考えられる。それでは、このようなロッシャーの方法は、どのような時代の思想的、学問的文脈の中で着想されたのだろうか。それを解明する1つの出発点として次章では、歴史的方法が立脚している2つの考え方が、どのような系譜を引いているものかを見ていこうことにする。

IV. 歴史的方法の系譜

まず、『ソフィスト』について注目しなければならないのは、ロッシャーの哲学に関する全般的な知識が誰に由来するのかということである。なぜなら、彼はその中で、古代から近代に至るまでのたくさんの哲学者の名前を挙げているが、脚注を見る限り²⁷⁾、彼ら一人一人に精通していたとは言えないからである。そこで、同じく脚注及び本文中の参照²⁸⁾を詳しく調べてみると、彼らの哲学に関する全般的な知識がリッター (A. H. Ritter, 1791-1869) の『哲学史』²⁹⁾から得られていたことがわかる。そして、このことはまた、ロッシャーの哲学に関する知識のある部分が哲学史家リッターに依っていたことを示しているのである。リッターはロッシャーの指導教官ではなかった³⁰⁾が、ロッシャーの手紙 (1840年6月5日付) によるとランケの下で研究を続けるように勧める³¹⁾など、ロッシャーに対して影響力のあった人物であった³²⁾。

また、前章で説明した政治哲学の「主観的性質」と歴史的学説の客観的性質との対比について振り返ると、政治哲学を「主観的」なものとして捉えるきっかけを与えた考えがその前提にあったと言える。それは、哲学者は自分が生きている時代、自分に影響を与えていた道徳や慣習、そして、制度に基づいて理想の国家像を示す、ということである。このロッシャーの考えは、哲学とは精神の自己展開を対象とする学問であるから、慣習・道徳の発展とは独立しているというヘーゲルの思想ではなく、それらと社会の発展と連動して哲学が形成されるとする見方に依拠していると言える。『ソフィスト』が執筆されている時に、ロッシャーの身近でこのような視点をもっていた人物は哲学史家リッターであった。彼がロッシャーに思想的な影響を与えた可能性がある。

次に、人類史の考えが誰に由来するのかという問題であるが、それは、『トゥキディデス』の中の歴史記述に関する言及がゲルヴィヌスの『歴史学の基本的特徴』³³⁾（以下、『基本的特徴』と記す）を参照しながら書かれていることから、彼に由来するものと考えてよいだろう。

『基本的特徴』を参照しながら書かれている章は、特に第4章である。この章では、歴史的学芸 (*historische Kunst*) の発展という見出しが付けられているように、歴史記述の発展史がまとめられている。権力の事業としての歴史編纂から、政治批判を目的とした実用主義的歴史記述を経て、科学的歴史記述へと発展することを論じた³⁴⁾ゲルヴィヌスの考えを参考にしていることが窺える。歴史記述の発展史に限らず、4章以前の内容である、哲学者と詩人と歴史家の対比から歴史家の性

格を明らかにする部分の論証の仕方も、『基本的特徴』に見られる論証と類似している³⁵⁾。さらに、ゲルヴィヌスによると、「本物の歴史家」(der achte Historiker³⁶⁾) は本来哲学者と詩人が属する必然的世界と可能的世界をも考慮するのに対して、「一面的な歴史家」(der einseitige Historiker³⁷⁾) は現実的世界だけに留まってそれらの世界を無視するというのである³⁸⁾が、ロッシャーの場合「歴史的芸術家」(der historische Künstler³⁹⁾) と「歴史的職人」(der historische Handwerker⁴⁰⁾) という別の言葉を当てられているだけで、同じことが論じられている⁴¹⁾。他にも、類似している点がある。ゲルヴィヌスは、歴史家における哲学者的性格と詩人の性格を以下のように捉えている。「歴史家は、与えられた一連の事実の中に必然的なものを認識する。それはいわば、歴史家が哲学者の領域にいるようなものである。しかし、自分にとって最も意味のあるものが事実であることを常に意識できているのであれば、そして、歴史的哲学者でも、決して哲学的歴史家でもない、思考する歴史家になろうと望んでいるならば問題はない。歴史家は一旦必然的なものを認識したら、歴史的素材をその周りに芸術的に自由な仕方で整理する。そのとき、本当のことや実際のことに対して畏敬の念を示すことができるのであれば、そして、歴史的詩人でも、決して詩人の歴史家でもない、意味深い整理をし、芸術的描写をする歴史家になろうと望んでいるのならば、その道から外れることはない。」(Gervinus, 1837, S. 33.) ロッシャーも同様な見解を表明している。「歴史固有の長所がある。哲学と詩作のそれぞれの優れている点が歴史の中で統合されるということである。歴史は詩作と、現存しない人物

を生き生きと描くという至福を共有し、哲学と、不規則だと思われたものを一般的な原則に従って整序するという別の至福を共有している。」(Roscher, 1842, S. 35.) このように、2人が念頭においている歴史記述が、哲学と詩作の性格を兼ね備えているという点で共通のものであることが分かる。

また、両者の歴史的学芸についての見解も共通している。ゲルヴィヌスが、「(歴史的；丸岡による補訳) 学芸の作品は、とりわけ完結しているものであることが要求される。それゆえ、まとめられた全体と一貫した計画が求められる。また、1つの全体を形成するようには部分が作られなければならない」(Gervinus, a. a. O., S. 31.) と述べていることが、ロッシャーでは、「どの箇所からも作品全体が読み取れ、どの作品からも全人類が読み取れることが、歴史的学芸の作品の主要原則」(Roscher, a. a. O., S. 52.) である、という言葉で表現されている。

『基本的特徴』を読む限りでは、人類史に関するゲルヴィヌスの考えは明らかにならない。しかし、ダールマンの『政治学』に対する彼の書評⁴²⁾を読むと、彼は確かに、描こうとする歴史から出発して、関連する全ての歴史を記述していくと、最終的に人類史を描くことになると想えていた⁴³⁾ことが明らかになるのである。

以上のことから、『要綱』で歴史的方法による経済学を構想する上で重要であった2つの考え方は、2人の歴史家からロッシャーが受け継いだ可能性があると言える。そして、このことはまた、彼の経済学を理解するためには、2人の歴史家の思想が生まれてくる背景も把握しておかなければならぬということを意味している。

V. まとめ

19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、ドイツ歴史学派によって用いられたいわゆる「歴史的方法」は、歴史的相対主義を主張するものとして理解されている。それは、異なる歴史を経験した人間の政治的ないし経済的所産が、国ごとに別様に現れることに着目するというものである。しかし、特に旧歴史学派の主要人物それぞれの方法を詳しく見てみると、それらはともに歴史的相対性を強調するものといえども、実体は、多様であったことが明らかになる。例えば、本論で扱ったロッシャーでは、確かに、政治的ないし経済的所産は国ごとにまたは、時代ごとに個性的に現れると強調されていたが、比較研究を通して明らかになるそれらの普遍性も念頭におかれていた。ヒルデブランド (B. Hildebrand, 1812-1878) においても、そのような普遍性の容認が見られる。ただし、彼の場合は、歴史とは目的論的な発展経過であり、それが政治的ないし経済的活動を規定すると理解されていた。それゆえ、主に、精神的発展段階における普遍性が念頭におかれていたことになる⁴⁴⁾。これに対して、クニース (K. Knies, 1821-1898) では、目的論的な発展が国ごとに別様に現れると考えられていたから、各国間の精神的活動における普遍性は否定されている⁴⁵⁾。ロッシャーやヒルデブランドと違ってクニースには、徹底した歴史的相対主義が見られる。また、近年、学派の定義を巡る議論⁴⁶⁾がなされたが、それはまさに、理論ないし方法の共有という点でまとめられる一定の学者集団が認識困難であることを示唆していたと言える。

本稿は、こうした多様性を、一枚岩ではなかった当時の歴史学における思想⁴⁷⁾との関係

ロッシャーの「歴史的方法」の再検討

から解明する研究の端緒を開くものとして、ロッシャーの歴史的方法と歴史学とのつながりを論証した。そして、『要綱』で説明された歴史的方法による経済学が、リッターやゲルヴィヌスといった歴史家から受け継いだ歴史学に関わる思想と、その思想を基にして書かれたロッシャーの歴史学方法論に関する考察を土台にしていることを示したのである。

注

- 1) ドイツ歴史学派についての論考には、ヴィルヘルム・ロッシャー、ブルーノ・ヒルデブラント、カール・クニースを旧歴史学派とし、グスタフ・シュモラーやルヨ・ブレンターノらを新歴史学派とする慣行が存在する。(田村, 1998, 56-57頁参照)しかし、近年、歴史学派はシュモラーを中心にして形成された学派である、というシュンペーターの見解が受け入れられるようになり、旧歴史学派の存在が疑われている。
- 2) Roscher (1843), S. V.
- 3) この著書はシュモラー (G. v. Schmoller, 1838-1917) との方法論争の引き金となった。日本語訳は、福井孝治・吉田昇三訳、吉田昇三改訳、『メンガー経済学の方法』、日本経済評論社、1986年である。
- 4) Menger (1883), S. 200 ff. 小林 (1990), 108-109頁も併せて参照。しかし、歴史法学派の綱領雑誌 (『歴史法学雑誌』 (*Zeitschrift fuer geschichtliche Rechtswissenschaft*, Berlin.) を指す) の創刊 (1815年) にあたってサヴィニーが明確にした、歴史的 (geschichtlich) と非歴史的 (ungeschichtlich) (Savigny, 1815, S. 2.) という言葉の区別 (Ebd., S. 2 ff. 法学における歴史学派と非歴史学派の区別という形でまとめられている) を参照する限り、両者の方向性は全く異なっていたとも言いがたい。なぜなら、そこで論じられていたことは、精神的所産が歴史的連関の中で規定されることを認めるか否か、ということに加

えて、歴史的連関を認めない場合、それが恣意によるものとして捉えられる、ということだったからである。(Ebd., S. 2 ff.) その議論は、哲学では主観的真理しか明らかにならないというロッシャーの考え方、すなわち、歴史ではなく自らの経験を判断基準とするため、恣意的とも捉えられる判断を下すことになるという考え方と相通じるものであったと言うことができよう。

- 5) Menger (1883), S. 216 ff. 前掲日本語訳では、198-201頁参照。
- 6) この論文は、『ロッシャーとクニースおよび歴史的国民経済学の諸問題』の第1部に相当する。
- 7) Weber, M. (1903), S. 10. 日本語訳、24-25頁。
- 8) Ebd., S. 15. 同上、34頁。
- 9) 草稿とは、ここでは彼の書簡を指している。自筆原稿のことではない。
- 10) Eisermann (1956), S. 119 ff.; S. 124.
- 11) *Preußische Jahrbücher*. Bd. CXXXIII. Heft 3., S. 383 ff.
- 12) Hübinger (1984a), S. 234.; (1984b), S. 66; S. 99 ff. ヒュービンガーはアイザーマンの見解を参考していることは疑いようがない。しかし、ゲルヴィヌスをゲッティンゲン学派の一人として捉えているアイザーマンに対して、彼は、その分類を完全に受け入れているわけではない。Vgl. Hübinger, a. a. O., 1984a, S. 228 ff.
- 13) cf. Roscher (1838). タイトルの日本語訳は、榎原の訳に従った。榎原 (1954), 13頁参照。参考のため独訳者たちによるタイトルを翻訳すると、『旧ソフィストに見られる歴史的学説の痕跡について』となろう。Vgl. Roscher (2002).
- 14) Roscher (1843), S. III ff. 日本語訳では、17-24頁。
- 15) 解釈によっては⑦と⑨も根拠として含めてよいのかもしれない。ロッシャーが骨子の個々の関連について明らかにしていないから、解釈の余地はある。
- 16) 『要綱』第4編冒頭で、「国家経済学的著述の叙事的な部分と指針的な部分との区別、前者は単に真か偽かを問い合わせ、後者はもっぱら周囲の事情に従って判断を行うものである。国民の欲望も権利感情

もともに結局において常に充足されてゆくものである。だから国家に関して有効とか適法とかいう概念は、時代の諸欲望と権利観念とが変遷するに応じて、多様に相対的であるに過ぎない。…（中略）…なぜ政治的・経済的理論は、古代諸国民においても、現代諸国民においても、高度の経済段階になって初めて体系的に形作られることになるのか。」（日本語訳、291頁を参照）とロッシャーが述べていることにも注目すべきである。

- 17) 政治学と経済政策とを含む學問。
- 18) Roscher (1838), p. VI.; (2002), S. 33.
- 19) ロッシャーは、政策論を党派に関わる、すなわち、「主觀的」な學説として捉えていた。Vgl. Roscher, a. a. O., 1843, S. 144. 前掲日本語訳、291頁参照。
- 20) Roscher, a. a. O., 1843, S. 1.
- 21) 2 部のトゥキディデスは、『戦史』の文献学的研究がまとめられている。近年『トゥキディデス』の復刻版が出版されたが、それは、この 2 部が、古代史の研究論文として注目されたからである。ヴィルヘルム・ヘニスによると、ヴェーバーも、古代史を研究していた際に、『トゥキディデス』を読んだ。この実証研究は大変興味深いものだが、ヴィルヘルム・ゲオルク・フリートリッヒ・ロッシャーと、息子であり学者のヴィルヘルム・ハインリッヒ・ロッシャーを混同していると思われる箇所が一箇所見られた。
- 22) 柳原 前掲書、14頁参照。彼も『トゥキディデス』には「5 章からなる序説があり、歴史科学の学的性格を、詩と哲学と対比させて究明している」と述べている。
- 23) Roscher (1842), S. 20.
- 14) 例えば、ペロボネソス戦争発生までの経緯を著した歴史が念頭にある。
- 25) Ebd., S. 20.
- 26) Ebd., S. 22.
- 27) 『ソフィスト』には参考文献一覧がない。
- 28) Roscher, a. a. O., 1838, p.14. fn.3; p.26; p.45; p.47; p.63; p.64; p.65; p.65. fn.4; p.67. fn.6; p.68. fn.10; p.71; p.71. fn.3; p.72. fn.4.; a. a. O., 2002, S.51; S.65; S.85; S.87; S.105; S.106;

- S.107; S.109; S.110; S.114; S.115.
- 29) Ritter, H., Geschichte der Philosophie alter Zeit. in: *Geschichte der Philosophie, Th. 1-4*, Hamburg: Perthus, 1829-1853.
- 30) Roscher, a. a. O., 2002, S. 140.
- 31) Autograph: Roscher an Gervinus (1840)
- 32) Roscher, a. a. O., 1842, S. V. Vgl. Baur (2001), p. 15. fn. 18.
- 33) Gervinus, G. G., *Grundzüge der Historik*, Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1837.
- 34) Ebd.
- 35) 哲学者と詩人と歴史家との対比は、ゲルヴィヌスを模倣した可能性が考えられる。Vgl. Roscher, a. a. O., 1842, zweites Kapitel.; Gervinus, a. a. O., 1837, S. 14 ff.
- 36) Gervinus, a. a. O., 1837, S. 18.
- 37) Ebd., S. 20.
- 38) Ebd., S. 17 ff.
- 39) Roscher, a. a. O., 1842, S. 11.
- 40) Ebd.
- 41) Vgl. ebd., S. 11 ff.
- 42) Gervinus, G. G., Ueber Dahlmann's Politik. in: *kleine historische Schriften, Bd. 7*, Karlsruhe: Hasper, 1838. この書評を使って、メンガーはゲルヴィヌスの思想をまとめている。Vgl. Menger, a. a. O., 1883, S. 217 ff. 前掲日本語訳、199-201 頁参照。
- 43) Gervinus, a. a. O., 1838, S. 596.
- 44) 田村 (1992), 99-101頁参照。
- 45) 同上。
- 46) Grimmer-Solem/ Romani (1998), Second Chapter, pp. 270-276.
- 47) これは、歴史主義のこと意味している。そして、それは、18世紀後半から20世紀初頭までのドイツ歴史学の特徴を示す用語である。それゆえ、旧歴史学派が活躍した時代（19世紀半ばから世紀末）だけを取り上げてみても、さまざまな歴史学に関する考え方方が存在したことが想像つく。それに、ランケと政治史家との考え方の違い、また、政治史家と西南ドイツ学派との考え方の違いが指摘できるように、その内容が時間的に変化してい

ロッシャーの「歴史的方法」の再検討

ることも確認できる。このことについての論証は、別の機会に行うつもりである。

参考文献

- 赤羽豊治朗（1959）「ヴィルヘルム・ロッシャー」，『松商論叢』，第六卷，183-200頁。
- アリストテレス（2001）『政治学』，牛田徳子訳，西洋古典叢書 京都大学学術出版会。
- 小林昇（1990）「リストと経済学における歴史主義」，『小林昇経済学史著作集VII F・リスト研究（2）』，第2刷，未来社，101-224頁。
- 榎原巖（1954）「ロッシャー研究—経済の史的現実性の把握に立つ経済学—」，『青山経済論集』，第六卷第一号，1-49頁。
- （1958）「経済の史的現実性の自覚に立つ経済学—ヴィルヘルム・ロッシャー」，『社会科学としてのドイツ経済学研究』，東京 平凡社。
- 塩野谷祐一（1995）『シュンペーター的思考—総合的社会科学の構想』，東洋経済新報社。
- （1998）「シュンペーターと歴史学派」，『歴史学派の世界』，住谷一彦・八木紀一郎編，日本経済評論社，119-143頁。
- 白杉庄一郎（1956）「歴史派経済学（I）—ロッシャー、ヒルデブラント、クニース、シュモラー—」，『経済学説全集5 『歴史学派の形成と展開』』，大河内一男編，東京 河出書房。
- ソフィストたちプラトン（2002）『プロタゴラス』，藤沢令夫訳，第18刷，岩波文庫。
- 田村信一（1992）「ドイツ前期歴史学派」，『経済学史概説—危機と矛盾のなかの経済学—』，永井義雄編著，ミネルヴァ書房，87-101頁。
- （1993a）『グスタフ・シュモラー研究』，御茶の水書房。
- （1993b）「ヴィルヘルム・ロッシャーの歴史的方法—『歴史的方法による国家経済学講義要綱』刊行150周年にあたって—」，『経済学史学会年報』，第三十一号，27-33頁。
- （1994）「ヴィルヘルム・ロッシャー—ドイツ歴史学派の創始者」（エコセミナー・世界の経済学者〔64〕），『エコノミスト』，vol.72 (17), 98-99頁。
- （1998）「国民経済から資本主義へ—ロッシャー、シュモラー、ゾンバルト」『歴史学派の世界』，住谷一彦・八木紀一郎編 日本経済評論社，55-75頁。
- トゥキディデス（1997）『戦史』，久保正彰訳，世界の名著5『ヘロドトス／トゥキディデス』，責任編集 村川堅太郎，第七版，中央公論社。
- 橋本昭一（1975）「メンガーのロッシャー評—1894年追悼文を中心に」，『関西大学経済論集（関西大学）』，第二十五卷第五号，577-587頁。
- 浜林正夫（2003）「第一部，5 近代歴史学の成立」，『歴史学入門』，浜林正夫・佐々木隆爾編，第8刷，有斐閣Sシリーズ，157-183頁。
- ヘーゲル（1994）『歴史哲学講義（上）』，長谷川宏訳，第1刷，岩波文庫。
- リハ、トマス（1992）『ドイツ政治経済学—もうひとつの経済学の歴史—』，原田哲史／田村信一／内田博訳，ミネルヴァ書房。
- プラトン（2001）『テアイテオス』，田中美知太郎訳，第36刷，岩波文庫。
- （2002a）『国家（上）』，藤沢令夫訳，第1刷，ワイド版岩波文庫。
- （2002b）『国家（下）』，藤沢令夫訳，第1刷，ワイド版岩波文庫。
- （2003）『ゴルギアス』，加来彰俊訳，第39刷，岩波文庫。
- Baur, Siegfried, (2001), Franz Leopold Ranke. the Ranke Library at Syracuse and the Open Future of Scientific History, in: *Syracuse University Library Associates COURIER*, Mary Beth Hinton (edt.), Vol. XXXIII. 1998-2001, pp. 7-41.
- Blanke, Horst Walter/ Fleischer, Dirk/ Rüsen, Jörn (1983), Historik als akademische Praxis. Eine Dokumentation der geschichtstheoretischen Vorlesungen an deutschsprachigen Universitäten von 1750 bis 1900, in: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften 1*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, S. 182 ff.
- Brandt, Karl (1993), *Geschichte der deutschen*

- Volkswirtschaftslehre Band2. Vom Historismus bis zur Neoklassik, Freiburg i. Br.: Haufe.
- Eisermann, Gottfried (1956), Zweiter Teil: Die ältere historische Schule, 1. Kapitel: Wilhelm Roscher (1817-1894), in: *Die Grundlagen des Historismus in der deutschen Nationalökonomie*, Stuttgart: Enke, S. 119 ff.
- Gervinus, Georg Gottfried (1837), *Grundzüge der Historik*, Leipzig: Wilhelm Engelmann.
- (1838), Ueber Dahlmann's Politik, in: *kleine historische Schriften*, Bd. 7, Karlsruhe: Hasper, S. 593 ff.
- Giouras, Thanasis (1995), Wilhelm Roscher: the "historical method" in the social sciences Critical observations for a contemporary evaluation, in: *Journal of Economic Studies* vol.22 No.3/4/5., pp. 106-126.
- Grimmer-Solem, Erik/ Romani, Roberto (1998), The Historical School, 1870-1900: a cross-national reassessment, *History of European Ideas*, Vol. 24, Nos. 4-5, pp. 267-299.
- Hübinger, Gangolf (1984a), Forschendes Erklären. Georg Gottfried Gervinus' Mittelstellung zwischen Aufklärung und Historismus., in: *Historisch-Politische Diskurse Band 1. [Hrsg.] Horst Walter Blanke/ Jörn Rüsen Von der Aufklärung zum Historismus zum Strukturwandel des historischen Denkens*, Paderborn; München; Wien; Zürich: Ferdinand Schöningh, S. 227 ff.
- (1984b), Georg Gottfried Gervinus. Historisches Urteil und politische Kritik, in: *Schriftenreihe der historischen Kommission bei der bayerischen Akademie der Wissenschaften Band 23*, Göttingen: Vandehoeck & Ruprecht.
- Iggers, Georg G. (1997), Das theoretische Fundament des deutschen Historismus II Leopold von Ranke, in: *Deutsche Geschichtswissenschaft*, Wien; Köln; Weimar: Böhlau, S. 86 ff.
- Menger, Carl (1883), *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere*, Leipzig:
- Duncker & Humblot. 福井孝治・吉田昇三訳 吉田昇三改訳 (1986) 『メンガーニー経済学の方法』, 日本経済評論社。
- Milford, Karl, (1994), Roschers historische Methode, in: *Die vorliegende Schrift erscheint als Kommentar zur Faksimile-Ausgabe der 1861 erschienenen Erstausgabe von WILHELM ROSCHER ANSICHTEN DER VOLKSWIRTSCHAFT AUS DEM GESCHICHTLICHEN STANDPUNKTE*, Düsseldorf: Verlag Wirtschaft und Finanzen, S. 161 ff.
- (1995), Roscher's epistemological and methodological position. Its importance for the Methodenstreit, in: *Journal of Economic Studies* vol.22 No.3/4/5., pp. 26-52.
- Pandel, Hans-Jürgen (1994), Von der Tee-gesellschaft zum Forschungsinstitut. Die historischen Seminare vom Beginn des 19. Jahrhunderts bis zum Ende des Kaiserreichs, in: *Transformation des Historismus Wissenschaftsorganisation und Bildungspolitik vor dem Ersten Weltkrieg. [Hrg.] Horst Walter Blanke*, Waltrop: Hartmut spenner, S. 1 ff.
- Priddat, Birger P. (1995), Intention and Failure of W. Roscher's Historical Method of National Economics, in: *The Theory of Ethical Economy in the Historical School*, ed. Peter Koslowski, Springer-Verlag, pp. 15-38.
- Ritter, Heinrich (1836), *Geschichte der Philosophie alter Zeit. Erster Theil. Zweite verbesserte Auflage*, Hamburg: Friedrich Perthes.
- (1853) *Versuch zur Verständigung über die neueste deutsche Philosophie seit Kant*, Braunschweig: C. A. Schwetschke & Sohn.
- (1867) *An Leopold von Ranke über deutsche Geschichtschreibung. Ein offener Brief*, Leipzig: Fues's Verlag.
- Roscher, Wilhelm (1838), *Historiae doctrinae apud sophistas maiores vestigiis*, in: *Dissertatio inauguralis quam pro summis philosophiae artiumque liberalium honoribus in Academia*

ロッシャーの「歴史的方法」の再検討

- Georgia Augusta Gottingae, Typis expressit officina dieterichiana.*
- (1842), *Leben, Werk und Zeitalter des Thukydides. Mit einer Einleitung zur Ästhetik der historischen Kunst überhaupt*, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- (1843), *Grundriß zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft. Nach geschichtlicher Methode*, Göttingen: Druck und Verlag der Dieterichschen Buchhandlung.
- (1849), Der gegenwärtige Zustand der wissenschaftlichen Nationalökonomie und die nothwendige Reform desselben, in: *Deutschvierteljahr-Schriften*, Stuttgart; Tübingen, S. 174 ff.
- (1854), Die Grundlagen der National-ökonomie. Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende, Stuttgart; Augsburg: J. G. Cotta'scher Verlag.
- (2002), *Wilhelm Roscher Über die Spuren der historischen Lehre bei den älteren Sophisten (1838)*, Herausgegeben, übersetzt, mit Erläuterungen und einem Anhang versehen von Leohard Bauer, Hermann Rauchenschwandtner und Cornelius Zehetner, Marburg: Metropolis Verlag.
- Savigny, Friedrich, (1815), Ueber den Zweck dieser Zeitschrift, in: *Zeitschrift fuer geschichtliche Rechtswissenschaft, 1. Band*, Berlin, S. 1 ff.
- Schefold, Bertram (1994), Wilhelm Roschers »Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte «, in: *Die vorliegende Schrift erscheint als Kommentar zur Faksimile-Ausgabe der 1861 erschienenen Erstausgabe von WILHELM ROSCHER ANSICHTEN DER VOLKSWIRTSCHAFT AUS DEM GESCHICHTLICHEN STANDPUNKTE*, Düsseldorf: Verlag Wirtschaft und Finanzen, S. 5 ff.
- Schumpeter, J. A., (1955), *History of Economic Analysis. ed. from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter. second printing*, New York: Oxford University Press. 東畑精一訳 (1958)『経済分析の歴史 4』, 岩波書店。
- Streissler, Erich W. (1995), Increasing returns to scale and the prospects of small-scale enterprises, in: *Journal of Economic Studies vol.22 No.3/4/5*, pp. 16-25.
- (2001), Rau, Hermann and Roscher: contributions of German economics around the middle of the nineteenth century, in: *The European Journal of the History of Economic Thought 8 & 3 Autumn*, Routledge, pp. 311-331.
- Tribe, Keith (1988), *Governing Economy. The Reformation of German Economic Discourse 1750-1840*, Cambridge University Press.
- Weber, Max (1903), Roschers ≫ historische Methode ≪, in: *Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie*. 松井秀親訳 (1955)「ロッシャーの歴史的方法」, 『ロッシャーとクニース(一)』, 未来社, 9-87頁。
- Weber, Wolfgang (1984), Wissenschaftssoziologische Aspekte des Strukturwandels der Geschichtswissenschaft von der Aufklärung zum Historismus, in: *Historisch-Politische Diskurse Band 1. [Hrsg.] Horst Walter Blanke/ Jörn Rüsen Von der Aufklärung zum Historismus zum Strukturwandel des historischen Denkens*, Paderborn; München; Wien; Zürich: Ferdinand Schöningh.

主要資料

Autographen

Roscher an Gervinus den 5. Junius 1840
Roscher an Gervinus den 3. September 1842

Vorlesungsverzeichnisse

Index Scholarum publice et privatum in Academia Georgia Augusta per semestre

Hibernum ANNI NDCCCXL-XLI, Gottingae:	<u>Zeitschriften</u>
TYPIS EXPRESSIT OFFICINA DIETE -	<i>Göttingische gelehrte Anzeigen</i> 156. Stück. Den
RICHIANA	26. September 1840
— per semestre Aestivum ANNI MDCCCXLI	— 118. Stück. Den 25. Julius 1842
— per semestre Hibernum ANNI	— 119.120. Stück. Den 28. Julius 1842
MDCCCXLI-XLII	— 121. Stück. Den 30. Julius 1842
— per semestre Aestivum ANNI	— 176. Stück. Den 4. November 1843
MDCCCXLI	— 50.51. Stück. Den 28. März 1844
— per semestre Hibernum ANNI	
MDCCCXLII-XLIII	Roscher, Carl (1908), Wilhelm Roscher an
— per semestre Aestivum ANNI	Leopold Ranke. Ein Stück Wissenschafts-
MDCCCXLIII	geschichte. (1842), in:
— per semestre Hibernum ANNI	<i>Preußische Jahrbücher 1908 Bd. CXXXIII. Heft</i>
MDCCCXLIII-XLIV	3., S. 383-386.
	Hoft, Bernhard/ nach seinem Tod. Herzfeld, Hans
	(hrsg.) (1949), An Wilhelm Roscher, Berlin, 6.
	März 1842, in: <i>Leopold von Ranke Neue Briefe</i> ,
	Hamburg: Hoffmann und Campe Verlag.
	Dotterweich, Volker/ Fuchs, Walther Peter (hrsg.)
	(1975), Verzeichnis der Rankesschen Vorle-
	sungen, in: <i>Leopold von Ranke Vorlesungs-</i>
	<i>einleitungen</i> , S. 29ff., München; Wien: R.
	Oldenbourg Verlag.

(名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程)